
ニートになりたい神殺し

使徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニートになりたい神殺し

【コード】

N3007N

【作者名】

使徒

【あらすじ】

ある日、偶然神殺しに成功してしまった草薙光一。そんな彼の将来の夢はニート。しかし、幸か不幸か運命は彼を中心に動き出す。

この作品は処女作です。誤字脱字などあるかもしれませんがよろしくお願ひします。また、作者に文才はまったくありませんので構文の悪さや執筆速度の遅さに目をつぶってもらえれば幸いです。

俺の人生が変わった日

現在の時刻は午前11時ぐらいだろうか。

「あゝ、だるい眠みい降りて〜」

授業なんぞという面倒事は放棄して学校の屋上で横になる。

* * *

俺の名は草薙光一、普通の高校一年生だ。……すまん、それはただの願望だ。ちょっと現実逃避してみたかっただけだ。

言い直そう。

俺の名は草薙光一、碧黎高校一年生兼神殺し。

学校の進路希望用紙の第一志望の蘭にニートとか書いてる俺がなぜこんな肩書をもっているかと言うと、それには深い(?)理由がある。

* * *

中学三年生の夏休み、俺は登山の最中に家族とはぐれ、頭が八つもある蛇と出くわした。

おそらく、あれがあの有名な八岐大蛇ヤマタノオロチだっただろう。無駄に大きかったし、口から火も吹いてたな。あんなのが普通に生息しているならあの山の生態系は滅茶苦茶になっていただろうよ。

逃げようとしたけど無理っぽそうだったんで、なんかそこらへんに落ちてた石を投げつけてみたらピカーって光ってあのクソ蛇が消えちまった。呆気にとられたぜ。

あの時何が起こったのかは今になっても分からん。とりあえず現時点で分かっていることは俺があのクソ蛇を殺した「らしい」ことだけだ。結局あの石は本当に何だったんだろうな？

どれだけの時間呆けていたかは定かじゃないが、たぶん幻覚でも見たんだろうと思って家族探しを再開した。

やけに視力が良くなってるような気がしたが、その時は気のせいだろうさH A H A H A って感じだったな。

この後、家族はすぐに見つかった。

で、数日たって体の異変に気がついた。………というか現実を直視した。

やっぱり視力は上がってるし、体力や身体能力も軒並み向上してやがった。

試しに1？ほど走ってみたが……まったく疲れねえ。正直気味悪かったぞ。

それと、これは中三の二学期が始まってから気づいたことだが、言語の習得力が異常なことになっていた。

英語が読める！書ける！言える！

ついでに漢字とかも完璧になってた。

おかげで英語のテストは満点だ。真面目に勉強しているやつザマあ！
元々得意科目だった社会に加えて体育と英語と国語が得意科目に加
わったぜ。

当然、国語以外の三教科とも学年トップだ（国語は自国語のため英
語に比べて内容が複雑であり、さすがに作文とかは言語習得能力だ
けではどうにもならなかった）。

妹の梓にも驚かれたぜ。

ああ、俺には一コ下に梓あずさ、という妹がいる。

しかも義理だぜ義理！ 何のエロゲだよw
が、残念なことに今までエロゲ的なイベントは皆無。せいぜい朝起
こしに来てくれるぐらいだな。

現実 is 厳しいってことかね。

まあ、兄妹仲は良い方なのがせもてもの救いか。フラグが立つ可能
性はまだ十分残っている！ 諦めるな俺！

.....

とまあ、こう言ってるの良いこと尽くめなように聞こえるだろうが、
そんな都合の良い話はそうそうないわけで、この力を手に入れたこ
とによつてこの後色々俺に厄介事が舞い込んできちまったんだな
これが。

今思えば、中三の夏休み後半から中学卒業時までが俺の人生の最高
峰だったんじゃないか？

中学卒業後の三月には神とガチで戦う破目になったしな。

まあ、その時の話についてはいつか語るとしよう。

気が向いたら・・・な。

とりあえず俺は寝る。

授業？

そんなものは知らん！

じゃあお休み。

俺の人生が変わった日（後書き）

初投稿・・・つまり処女作です。至らないところだらけですが、どうぞよろしくお願いします。

第1話 弓の巫女（前書き）

予定より時間がかかってしまいました。すべて私の文章能力の無さが原因です。さて、この話ではヒロイン（複数予定）の呉羽が登場します。呉羽が所属するのは原作のカンピオーネ！と同じく姫巫女。本来は別の組織名にする予定だったのですが・・・良さそうなのが思い浮かばなかったので原作同様にさせていただきました。

第1話 弓の巫女

時任^{ときとうくわは}呉羽は日本政府直轄の組織である姫巫女に所属し、弓の巫女の二つ名を持つ。

呉羽のところに一人の男性が訪ねてきたのは四月も終わろうかという頃だった。

「私は日本政府呪術委員会の小嶋^{こじま}と申します」

「こちらこそ。それで、本日はどのようなご用件で？」

「呉羽さんにはとある日本人の少年について確かめてもらいたいです」

「と、いいいますと？」

「その少年は真正銘の魔王ではないかと言われているのです」

「魔王……つまり神殺しですか？」

「ええ、我々としても信じ難いことなのですが、さまざまな情報や状況証拠を検証した結果どうやら本物の可能性が高いということになりました」

小嶋はボリボリと頭を書きながら申し訳なさそうに言う。

「ですので、呉羽さんにはその真偽のほどを確かめてもらいたいです。もちろん強制ではありません」

呉羽は少し黙考し、結論をだす。

「分かりました、お受けします。ですが・・・なぜ私なのでしょうか？」

「それはまあ、単なる偶然といいますが、呉羽さんがその魔王様とすでに面識があるからですよ」

「それはどういう意味ですか？その魔王の名は？」

「魔王の名は草薙光一といえます。呉羽さん、あなたのクラスメイトですよ」

「えっ？あ、あの草薙くんが！？」

思いもよらぬ名に目を丸くする呉羽であった。

「はい。草薙光一は今年の三月にイタリアに顕現した神、インドラを倒し神殺しとなった・・・と言われています。ただ、インドラとの戦いするときすでに神殺しとしての権能を使っていたという情報もあります。まあ、こちらは未確認なんですがね」

「すでに二柱もの神を！？」

「と、いう噂ですよ。インドラはともかく、その前に倒したと思われる神に関しては何の情報も無いので真偽のほどは定かではありませんがね。いずれにせよ、呉羽さんが彼から聞き出してくれれば分かるかもしれない」

「草薙くんとは二、三度言葉を交わしたことしかないですけど・・・」

やってみます」

小嶋は呉羽の発言に満足そうに頷くとその場を後にした。

* * *

「あゝ、寝み」

4時間目の授業が終わると俺は机の上に突っ伏した。つたく、あのハゲ教師無駄に授業長引かせやがって。ちつとは生徒のことも考えるよな。

こっちはさつさと・・・

「あ、あのすみません」

ん？誰かと思えば同じクラスの時任さんじゃないか。時任さんは十人が十人とも美人だと認める容姿をしている。そう見えないやつがいたらそいつの目は間違いない腐っているな。それにしても、時任さんが俺に話しかけてくるなんて珍しいこともあるもんだな。

「草薙くん、少々時間をとってもらってもいい？」

「別にいいけど・・・」

「ちよつと屋上まで来てもらえないかしら？」

周囲からは「この世の終わりだー！」とか「チクショーどうして草

薙が！」とか「キヤー、時任さんったら大胆」とか「草薙に天誅を
く」とか聞こえてくる。
うっせーよお前ら。

「・・・わかった」

周りの野郎どもの驚愕と嫉妬の視線を受けながら俺は時任さんと屋
上へ向かった。

* * *

・・・屋上に来ちまったな。

今から愛の告白とかだと嬉しいんだが・・・。
時任さんの雰囲気を見る限り告白じゃなさそうだな。残念。

「率直にお伺します、あなたは魔王ですか？」

魔王か、確かヨーロッパの魔術師どもが俺のことをそう呼んでたな。
さて、どう答えるかね。

何の事だと惚けてもいいが・・・時任さんには何らかの確証がある
んだろう。

時任さんが何者かも気になるし。
なにより、フラグが立つかもしれないしな。
なので・・・

「神殺し、という意味なら・・・Yesだ」

時任さんが息をのむのが聞こえた。

「で、時任さんは何者なのかな？」

「私は日本政府直轄である非公式呪術組織姫巫女の一人です」

姫巫女ね・・・以前アリシアから日本にそんな組織があると聞いた覚えがあるが。

それにしても、もう日本政府に嗅ぎつけられたか。どこから情報が漏れたのやら。

まあ、人の口に戸は立てられないって言うしね。仕方ないか。

別に知られるのはいいけどさ、こういうのって高確率で面倒事に巻き込まれるじゃん。

面倒事は嫌いで将来ニート志望の俺としては勘弁してほしいわけよ。もう一生分働いたと思うんだけどな。

「で、要件はそれだけ？」

「はい、日本政府より草薙くんが魔王かどうか確認してほしいと要請がきたので」

「・・・日本政府は俺に関してどこまで情報を持っているのかな？」

「私が知らされたのは、草薙くんが今年の三月にイタリアで雷霆神インドラを倒したということぐらい。それと、草薙くんはそれ以前から神殺しだったという情報もあるんだけど・・・」

ふーん、なるほど。まっ、インドラとの戦いに関しちゃ現地の魔術師何人かに知られてるからなく仕方ないか。

繰り返すが俺は面倒事が嫌いである。

だけど別にヒッキーってわけじゃないぞ！

休日は家でゴロゴロしてるけどな。

さて、面倒事が嫌いな俺としては無用な情報は提供しないに限る。時任さんと親しくなるのは大歓迎なんだが無駄なおまけがついてきそうだからな。

ん？ならさつき魔王だということをお教えたのはどうなんだって？

HAHAHAそんな昔のことは忘れたな！

「それについては否定させてもらうよ。神に出会ったのも戦ったのも運良く倒せたのもあれが最初さ。何度もあんな化け物と戦う趣味はないよ」

これについては本当だぞ。

八岐大蛇のときは戦いですらなかったし。

インドラのときは美少女アリスが危険な目にあってたらこそ、あのクソ神インドラと戦うことになったんだ。

あれが男だったら躊躇なく見捨ててたね。

「そう。今日はありがと」

「いやまあ、俺は質問に答えただけだから」

最後だけは嘘ついたけどな。

まあ、これも俺が快適なスクールライフを満喫するための方便つてやつだ。

そんなこんなで、俺たちの話は終わった。

教室に帰ったら男子連中から殺意満載の視線を向けられたぞ。

そんなことしてるから彼女できないんだぞ童貞ども。

俺も人のことは言えないんだがな。

まあ、時任さんに（正確には日本政府に）俺が神殺しだと認めてしまったことで、後に新たな神と戦うハメになったんだけどね。心境としては「ついカツとなってやった（時任さんフラグのために）、後悔はしていない」ってところだな。

第1話 弓の巫女（後書き）

現在の進捗としては1、2ができて5が完成しかけてるところです。
3、4が全然進まないのに5がどんどん進むとなんだか空しい気持ちになります。

第2話 予知夢⇄悪夢（前書き）

まだ神との戦闘に入れない・・・orz

戦闘の描写はそれなりにできているのですが、間や小さな隙間を埋めるのがなかなか難事業です。

第2話 予知夢Ⅱ悪夢

あゝ鬱だー。

朝から目覚まし五月蠅すぎだろ！

危うく叩き壊すところだったぞ

今日は火曜日、あと四日も学校とかないわ。

昔と違って土曜が休みでよかったぜ。

ゆとり万歳。

あ、そういえば金曜日はみどりの日だからあと三日か。

祝日万歳。

・・・現実逃避はこれくらいにしておこう。

さて、昨日のことについてだ。

時任さんが姫巫女・・・ね。

ん？

はっ！！！！

姫巫女ということは巫女服を着るのか！？ 着るんだな！

ならば、ぜひその姿をカメラに収めねば！

・・・

おっと本題から逸れてしまったな。

謎なのはどうしてこのタイミングで接触してきたかだ。

単に俺の情報が伝わったのが最近なのか？

それとも・・・

「おはよ。なぐに朝から難しい顔してんのよあんたは」

朝っぱらからこんなこと言ってくるやつは一人しかいない。

白川美琴^{しらかわみこと}。俺の幼なじみである。
昔から何かあることにこいつにシバかれるんだよなorz

「で、昨日時任さんと何があったのよ。美琴さんに話してみなさい」
ちっ、やはり聞いてくるか。

あの後、色々と追求がうざかったから五限だけ受けて帰ったのに（
当然六、七限目はサボり）。
俺が魔王だつてことはこいつ知らねーからな。
・・・知ってるやつのほうが少なえが。
適当に誤魔化しとくか。

「特に何も」

「ほんとに〜？ 何もなかったの？ 正直に言ってみなさいよ」

「何も」

「嘘。何もないわけじゃない！」

「ねえよ」

「しょ・う・じ・き・に・い・い・な・さ・い！」

怖ええええ！

拳握り締めるなよ。

あ、あれか。言わなかったら殴るってやつだな。
くっ、人はこうやって暴力に屈するのーか！

「実はな、時任さんは俺が魔王かどうか知りたかったんだよ。それ

で・・・」

ボカッ！

「な〜にバカなこと言ってるのよ！」

うわっこいつマジで殴りやがった！

本当のこと言ったのに。

まあね。俺も信じないこと前提だったんだけどね。と、バカなことやってる間に校門前についたぜ。

「あ、美琴にコウ。おはよ〜」

そう言って手を振ってくるのは佐天涼子。「さくてんりょうし

中学時代からの同級生だ。

「おはよう」

こちらは坂本澪。「さかもとみお

入学初日、だれも知り合いがおらずオロオロしていたところを俺が声をかけ、美琴たちに紹介したのが縁で友人になった。

聞けば、同じ中学から澪ちゃん以外だれもこの高校に進まなかったそうだ。

それが幸いしてだれかに取られる前に仲良くなれたってのはある意味皮肉。

いや〜お買い得物件だったね。

「それで、コウ。昨日のことについてなんだけど」

ブルータス（佐天涼子）お前もか！

まあ、予想通りといえばそうなんだが……。

「み、澪ちゃん助けてくれ」

俺は澪ちゃんに最後の望みを託す。

「私？ 私も詳しく聞きたいんだが」

なっ……人生オワタ。

「よ〜光一。朝から大変だな」

なんとか追求をかわしながら教室へ入ると、そこには俺の同士がいた。

田中健二^{たなかけんじ}。あだ名はたっけん（宅建）……なんだがイマイチなので普通にケンジと呼んでいる。

授業中居眠りをしてよく怒られてる。

だから俺の同類（＝同士）。

さすがに一日の全授業を爆睡し通した俺には及ばないがw

「ガリガリ君食いて〜。奢ってくれ」

「いや無理だろ」

そういえばここ学校の中だもんな〜。

帰りにでも奢ってもらうか。

ガリガリ君ぐらい自分で買わないのかって？

毎月エロゲ代で小遣いが吹っ飛ぶ俺にそんな余裕ないよ。

……席に座ったら眠くなってきたな。

「それじゃあ、俺は寝るから昼になったら起こしてくれ」
そう言って、俺の意識はすぐに闇に吞まれた。

* * *

ん？

俺は真っ黒いものに徐々に吞み込まれていく。

なんだこれは？

暗い・・・すべてを吞み込むような闇。

そしてこれは・・・

蛇・・・か？

それにこの感じ。

以前にも感じたことがある。

それも二度。

そうだ、これは神の気配！

なぜ・・・

これは・・・

いつたい！？

* * *

「はっ！」

何なんだあれは！？

「ハア・・・ハア・・・」

夢・・・にしては生々しすぎる。

あれは・・・

「おい、草薙」

「えっ？　なんでしようか？」

今俺に話しかけているのは教師の前原だ。

いつたいなんなんだ先生、俺は今忙しいんだから手短かに頼むぜ。

「今何の時間が分かっているか？」

周りを見渡すとみんなが俺を見ている。

美琴なんて笑いを堪えてやがる。

机の上には教科書とノートと筆記用具。

「あゝ、授業中ですね」

「そうだ、俺はもはやお前に寝るなどは言わん。それについてはもう諦めた」

まだ入学して一ヶ月も経たないのに教師に諦めさせてやったぜ。やるなー俺。

ん？

時任さんは心配そうな顔してるな。

巫女の力で俺の夢から何かを感じ取ったのか？

・・・なんてな。

そんな厨二病みたいなことあるわけないか。

「だが授業の邪魔だけはするな」

そう言つて前原は黒板に向かっていった。授業を再開するのだらう。

俺は再び寝るきにもならず、適当に授業を聞き流した。

* * *

「ぶつ、あんだ最高w」

昼休みに入って、美琴のやつは速攻で俺を笑いにきやがった。

「それで、いったいどんな夢を見たの？」

「ああ、・・・なんつゝか怖い夢だな」

怖い・・・っていうのはちょっと違ったけどな。
あれは恐怖感、潜在的な恐怖だった。

「どんな？」

涼子ちゃんが興味本位で聞いてくる。

「聞きたい？」

ニヤツと澪ちゃんの方を向く。

「ヒッ！」

澪ちゃんは怖い話が苦手である。

案の定ガタガタ震えだした。

「あゝほら澪、大丈夫だから」

美琴と涼子ちゃんが澪ちゃんをなだめている。

よし、逸れた！

「ほら、とつとと飯にするぞ」

思い出す前に昼食へと意識を誘導する。

しかし、そこで美琴が何かを思いついたような顔をした。

「時任さん、一緒に食べない？」

美琴のやつ昨日のことを時任さんから直接聞き出すつもりか。

「あ、はい。ご一緒させてもらおうわ」

俺、美琴、涼子ちゃん、澪ちゃん、ケンジのいつものグループに時任さんも加わって、計六人で食事をとる。

周りの視線（特に男の）がウザいが気にしたら負けだな。

美琴や涼子ちゃんは時任さんから昨日の件について聞き出そうとするが、時任さんは巧みにかわす。

うーん、如才ないな。

その後は特に何事もなく学校が終わり、俺は帰路についた（途中でケンジにガリガリ君を奢らせた）。

家に着いたころにはあの夢のこともすっかりと忘れ、届いていたエロゲの封を開けてやり始めた。

だが、このときすでに事態は動き出しており、俺がこの夢の意味について理解するのは実に一週間後のことであった。

第2話 予知夢Ⅱ悪夢（後書き）

御坂美琴 白川美琴、佐天涼子 佐天涼子、秋山澪 坂本澪。という変更を行っています。キャラを壊されたくないという人もいますと思いますので。かといって完全なオリキャラを書けるほど作者の文才は高くありませんw。なのでどうかご容赦を。ちなみに、呉羽やケンジにもモデルが存在します。日本政府呪術委員会の小嶋さんのモデルが原作の甘粕さんなのは・・・そのままですねw。

第3話 智慧の女神（前書き）

よ、ようやく書けました。プロの作家さんたちの大変さの一部を
解できた気がします。

第3話 智慧の女神

5月3日。

憲法記念日であり、ゴールデンウィークの第一日目でもあるこの日、呪術委員会の小嶋は時任呉羽のもとを訪ねていた。

「ゴルゴネイオン……ですか？」

「ええ、先日とある呪術師から接收しましてね。いったい何処で手に入れたのやら……。それと、強大な神の呪力を感じしました。おそらく、これと関係のあるまつろわぬ神の到来が予想されますねえ」

小嶋はどこか緊張感の欠けた声で話す。

「そんな……」

人は神には敵わない。それは自然の摂理である。

仮に、日本中の呪術師をすべて結集させても敵わないだろう。

草薙光一のような存在はあくまで例外中の例外なのである。

「神が相手となると我々ではどうしようもありません。おとなしくゴルゴネイオンを渡せば解決……とはいかないでしょうしね」

ゴルゴネイオンを追ってきた神が周囲のことも考えてくれるならよい。

しかし、『まつろわぬ神』はそのようなことを気にしない。

彼らは神という楔からある意味解き放たれた存在なのである。

故に、『まつろわぬ神』は神として人を庇護する必要はないのであ

る。

人は歩くとき虫を踏みつぶさないよう注意して歩くだろうか。

答えは否である。しても『靴が汚れる』『気持ち悪い』など、虫のことを考えてのことではない。

この人と虫を神と人間に入れ換えてみればいいだけの話である。

渡したはいいが、そこで力を解放されてはどんな被害が出るか想像もつかない。

「と、いうわけで時任さん、草薙光一氏のお力を借りませんか
え」

「く、草薙くんのですか!？」

「ええ、というか神に対抗できるのは同じ神か魔王・・・神殺ししかありえませんよ。マイナーな土地神程度なら封印という手段もあるんですが、ゴルゴネイオンが関係している以上それなりの神格と見ていいでしょうね」

もはや選択肢は一つにしぼられたわけである。

「わかりました。今から話してみます」

* * *

ヒヤッハー、今日からゴールデンウィークだぜ〜。

つまり一日中寝ほうだいつてわけだ。

目覚ましなんて胸糞悪いものに睡眠を邪魔されることもない。

ちなみに妹は^お学校の部活だ。

休日返上で部活なんて偉いよなあ、俺にはマネできんわ。
つーかもう夕方か。
でもまだ寝みい。

よし、今からまた二度寝だな。

ブルルルルルル

うるせえ！

何処の誰だ俺の睡眠を邪魔する不届き者は！
セールスとかだったらマジでキレルぞ。

「はい、もしも・・・」

「草薙くんですか？あの、私」

いや私とか言われてもな。

だけどこの声には聞き覚えがある。

「あ、もしかして時任さん？」

「ええ、ちよつと草薙くんの力を借りたいの」

俺の力・・・ね。

この切羽詰まった様子からして十中八九、神に関係することだろう。
というかそれしか考えられん。

アリシア曰く、神に対抗可能なのは神殺しだけのこと。
で、今現在日本に存在する神殺しは俺だけ。

小学生でも分かる計算だね

「神と戦えってことかな」

「・・・ええ、その可能性が高いわ。神に悪気はないのかもしれないけど、彼らが顕現すると色々と問題が起きるから」

「あくそう言えばアリシアもまつろわぬ神は歩く災厄だみたいなのと言ってたなあ」

「それで、受けてもらえる？」

まあ、本来なら否と言いたいところなんだが・・・

「わかった」

時任さんであれば話は別だ。

ここで協力すれば高感度up間違いなしだろう。

やっぱね、魔王になった以上ハーレムとか目指さないとね。
しかも上手く日本政府とかと交渉すればニートになるのも夢じゃなくね？

ハーレムニートか〜。
うん？

まあよ、これって所謂ヒモなんじゃ・・・orz
ま、そんな細かいことはどうでもいいやw

「だけど、もし戦いになった場合ここだと周囲への被害が洒落にならないと思うけど」

流石に神が相手だと周りに気を使う余裕なんてない。

「ええ、それは分かってるわ。ちょっと待ってて、今小嶋さんに車を出してもらおうから」

小嶋って誰？

* * *

で、着いたのが浜離宮恩賜庭園。

まあ、確かにここなら神と戦うことになったとしても人的被害は避けられるだろう。

俺の隣には弓をもった時任さんと小嶋とかいう胡散臭そうな人がいる。

それで、今俺はその小嶋さんからゴルゴネイオンに関するレクチャ―を受けているところだ。

「ゴルゴネイオンは古き地母の徴です。まあ、文字の無い時代の本・
・・とでも言えばいいんですかね？」

「どうしてこんなものが日本にあるんです？」

「どうやら市井の呪術師伝手にこっち（日本）まで持ち込まれたようですね」

なんつー迷惑な。

ぜってーそいつ後でシメてやる！

「調査によりますとだいたい一週間ぐらい前だそうで。まったく、
迷惑なものです」

一週間前・・・ああ、確か変な夢を見た日だったな。何か関係があ

るのか？

!!!!

「来た！」

夜の空に闇が広がり、一人の少女が天空より舞い降りてくる。

「異国の人間どもよ、妾の名はアテナ。蛇の印を渡して貰いたい」

.....

な・ん・だ・こ・の・か・わ・い・ら・し・い・幼・女・は！

そうか、アテナたんか。

萌えた！

お持ち帰りしてえ。

ロリコンじゃなかったんだけどな俺。

あいつらの主張も分かるような気がするぜ。

こんな所で新たなジャンルに目覚めるとは。

アテナは手を前へ差し出した。

すると、時任さんが持っていたゴルゴネイオンがアテナの手中へと飛んで行った。

「ようやく妾は三位一体を取り戻した。ふむ、久々の三位一体よな。少々戯れてみるのも一興か」

なんかやらかす気満々だなオイ。

「ゴルゴネイオンとやらを取り戻して満足か？ならとっととお帰り

「願いたいんだが」

「ほう、そなたは当代の神殺しか？妾は少しばかり遊んでみたいのだよ。妾と武を競わぬか？」

「なんでそうなる」

俺は頭が痛くなったぜorz

「妾たちとそなたらが出会ったとき、戦いとなるのは必然であろう？」

「そうなのか？」

「だがこの状況、説得は・・・無理っぽくね？」

「ちっ、面倒だがそれしかねえか」

虚空より天叢雲剣を招来し、手に構える。

「ふふ、やる気になったか。ならば妾もそれに応えねばなるまい」

コンクリートの路面が次々と隆起し、大蛇を形作っていく。
「いわば石の蛇。^{コンクリート}
その数八体。」

石の蛇つて・・・あれどうやって動いてんだよ。
まあ、今更そんなこと気にしてもしかたねえな。

俺は天叢雲剣を天に掲げ、言霊を言い放つ。

「我は蛇を討ちし者なり、あらゆる蛇を打倒うちたおさん」

そう宣言すると同時に八体の大蛇は塵となって霧消した。

「ほう、これは蛇殺しの言霊か。なかなか厄介な力をもっておるでわないか」

「そうかよ。なら、こいつはどつだ」

暴風で自由を奪い電撃で撃ち据える。

だが、どうやらアテナにはそれほど効いていないようである。

「ほお、妾には分かるぞ。そなたが殺めたのはインドラだ！雷を操る雷霆神であり天空の神。そしてその暴風は配下のマルト神群のもの」

さすがは智慧の女神、もうこちらの手の内を見切りだしている。

「ふふ、ではこちらから仕掛けてみようかの」

どこから取り出したのか、漆黒の鎌でアテナは斬りかかってくる。

早い！！！！

俺は天叢雲剣で受け止め数合打ち合つが、あの体型からは考えられない膂力で跳ね飛ばされる。

「草薙くん！」

俺が危ないとみた時任さんがアテナに向け弓を放つ。

「たかだか人間如きが邪魔をするでない」

アテナは石の槍を作り出し、時任さんに投擲した。

石の槍が時任さんを貫こうしたとき、俺は時任さんを庇ってその身に石の槍を受ける。

「ぐはっ」

「草薙くん!!!」

致命傷ではないが、槍は脇腹に深く突き刺さっている。
痛え!!!

ハンパなく痛え!

あのガキやりやがった!

悪い子にはお仕置きだ!

だが、この傷じゃそう長く戦えそうにない・・・か。
そろそろ決めねえとな。

アテナの属性は闇だ。

闇に対抗できるのは光。

そして、俺は光を生み出す術をもっている!

俺は石の槍を体から抜き取り、天叢雲剣を構える。

「すべてを焼する轟炎の焰よ、我に仇なす敵を滅さん」

天叢雲劍より放たれし焰がアテナを襲う。

「ぐううううううううううう」

アテナは黒き闇の障壁でもってその身を守る。

だが、

「さすがだな。だけど、今の貴様にこいつを防ぐ余力はあるか？」

俺は上空に呼び寄せた雷雲より雷を落とす。

炎と雷、これらは光源である。

つまり‘光’。

いかに闇を司るアテナとて強力な‘光’を二度続けざまに浴びれば・
・果たして耐えきれぬものなのか？

轟音とともに巨大な雷の奔流が降り注ぎ、アテナは雷の閃光に呑みこまれた。

* * *

満天の夜空だ。

俺が権能で呼び寄せた雷雲はもう無い。

ああ、さっさと風呂入りてえな。

と、巨大なクレーターができ、ボロボロになった庭園をあまり見ないようにして現実逃避してみる。

「草薙くん」

「勝ちましたか。それで、あれどうしますかね・・・生かしておいては後々面倒なので早く止めを刺すことを進言しますが」

そこには拗ねた顔のアテナがいる。

あの威力の雷で死ななかつたのかよ！さすがは神様だな。

あ、そういえばアテナって不死の神性もってたんだけ？

でも、さすがに止めを刺すのは気が引ける。

この幼女姿は反則だ！レッドカードだ。

「俺に幼女をいたぶる趣味はないですね。・・・お持ち帰りすることにします」

ええっ！？

と驚愕をあらわにする小嶋さんと時任さん。

「それでいいよな？」

「妾は敗者だ。勝者たるそなたに従おう」

そんなわけで、三柱目の神様に勝利した俺はアテナを連れ家へと帰還した。

家で妹と一悶着あつたのはある意味当然の話である。

まるで幼女誘拐犯を見るような眼で見られたぜorz

それと、連休明けに学校であつた時任さんから、

「あつ、あの、できれば私のことは呉羽って呼んで」

と言われた。

そして、それを聞いていた美琴たちに
O H A N A S I された
のは言うまでもないことである。

第3話 智慧の女神（後書き）

アテナ戦は結構あっさりと終わってしまいました。実は戦闘描写に
関してはもつと書いてあったのですが、上手く繋げることが出来な
かったため割愛しました。決して面倒になったからではありませんw
『アテナおっ持ち帰り』についてはヤっちゃた感があるものの、
後悔はしていません！

第4話 中間考査、これも戦いである(前書き)

よ、よ、ようやく完成した。これで一息つける。

第4話 中間考査、これも戦いである

Q:ここはどこ？

A:美琴の部屋です。

はい、というわけでわたくし草薙光一は幼馴染である美琴の部屋にお邪魔させてもらっています。

理由？

五月末に行われる中間試験の勉強。

中学時代から続く恒例行事だよ。

主に（9割以上）俺が教えてもらう側だけど。

だって普段授業聞いてないもん。

寝てるかサボってるかどちらかだし。

せっかく美琴大先生がいるんだから有効活用しないと。

美琴の方も「こっ、これは私自身の復習も兼ねてるの。べっ、別にあなたのためなんかじゃないわよ」とツンデレ丸出しで満更でもなさそうだし。

「で、ここはこうやるの」

「へっ」

さすがは美琴大先生、学校の授業なんかより分かりやすいぜ。

注 学校の授業はほとんど寝てるかサボるか聞いてないかのいずれかに該当します。

なんだかんだで面倒見いいよな美琴は。

「ここはこんな感じで・・・」

「マジで!?!」

「いや、なんであなたは分かんないのよ?」

「えっ?だって授業聞いてねえもん」

「ここ中学の範囲なんだけど・・・」

マジで!?!

「そんなことは忘れたな!?!」

そんな昔のことを覚えているわけないじゃないか。

「開き直ってんじゃないわよ」

美琴にチヨークスリーパーをくらわされる。

「ちよ、止め、苦し・・・」

ピンポーン

「すいませーん。兄さんいますか」

この声は梓か。やばい・・・息・・・が・・・

「梓ちゃん?入っていいよ」

「わかりました。おじやまします」

そういつて梓が入ってくる。

そこで梓が目にしたのはボロ雑巾になった光一の姿だった。

「え〜と、一体何が・・・？」

「ああ、気にしないで。このバカに天誅を下したただけだから」

* * *

「あとは、ここここを家でやっときなさい」

美琴の折檻からようやく立ち直った俺は課題を出され家へと帰った。今日あれだけ頑張ったのに課題とか・・・ヤル気起きねえっす。そんな俺の様子を見に梓とアテナがやってくる。

「兄さん、ちゃんとやってる〜？」

「やべっ・・・あっああ、ちゃんとやってるぞ」

当然ながらやってない。

寝る気満々だったぜ。

ジー

部屋にやってきた梓とアテナに白い目で見られる。そんな目で見えるなよ、いつものことじゃん。

予想どおりだったろ？

「もう、何やってないじゃないですか」

「えくと、睡眠準備？」

「まったく兄さんは・・・お風呂沸いたんだけどどうする？」

「先に入ってくれ」

「わかりました。ちゃんと勉強してください、兄さんのためなんですから」

そう言って梓は部屋を出ていく。

梓よお前は俺の親か何か？妹のセリフでは無いように思えるが・・・

「まったく・・・お主は、妾を倒すほどの器量があるくせにどうしてこうなのだ？」

それ関係なくね？

俺は昔からこんな感じだよ。

「そうだアテナ、お前の知恵を分けてくれ。そうすればテスト勉強なんて面倒なことは・・・」

「却下じゃ。それぐらい自分でやるのがよかるう。では、妾は梓の次ぎに風呂に入るとしよう」

そう言ってアテナも部屋から出ていく。

さて、梓とアテナが風呂を終えるまでやりますかね。
さすがに風呂に入った後勉強する気にはならんからな。

* * *

「あゝもう駄目」

「あゝ疲れたゝ、眠てゝ、マジ死ぬわゝ」

5日ばかりで行われた中間試験がようやく終わった。

明日・明後日はずっと布団の中によろ。そうしよう。

あゝアイス食いたくなってきた。

「ケンジさん、テスト終了記念ってことでガリガリ君よろ！」

「いやいや、ねえから」

「どうせゲーセン代に消えるんだからいいじゃん。世界史教えてや
つたる？」

「へゝ、ならあんたの試験勉強に付き合っただけ私には何を奢っ
てくれるのかしら？例えばクレープとか？」

美琴がニヤリとしながら暗にクレープを要求してくる。
しまった、藪蛇だった！

その後、美琴にクレープを奢らされたぜorz

* * *

中間試験の結果が返ってきた。

俺、美琴、呉羽、漣ちゃんは全員一桁。

涼子ちゃんとケンジはだいたい真ん中ぐらい。

順位は上から順に、漣（2位）、美琴（3位）、呉羽（6位）、俺（9位）、涼子（137位）、ケンジ（158位）となっている。

「私はあるが一桁台に入っているのが納得いかないわよ」

そういつて美琴は不貞腐れる。

「そうだな、意外だ」

漣ちゃん・・・普段俺をどんな目で見てるんだ？

まあ、そのとおりなんですけどね。

「裏切り者、コウは同類だと思ってたのに。普段全然授業聞いてないのになんでこんな点数取れるのさ」

ふっふっふ、今までの俺と一緒にされちゃ困るぜ涼子ちゃん。

そもそも俺には元々得意な歴史系に加えて、神を殺すことで手に入れた言語能力という圧倒的なアドバンテージがある。

中学時代には英語と国語ぐらいいしか生かせなかったが、高校に入る
と古典と漢文という科目が新たに加わったため俺の平均点数を大いに上げた。

残りの教科も美琴大先生に教えてもらったため、高得点をgetで

きたし。

得意科目が増え、例年の如く美琴大先生の教えを受けている俺に死角はない！

「光くんも陰で努力してるんじゃない」

言語能力について知っている呉羽だけが苦笑しながらフォローしてくれる。

が、

陰で努力？

テスト勉強？

そんなの一夜漬けに決まってるじゃん。

俺がテスト勉強なんて真面目にやるはずないだろ？

前日になるとさすがにヤヴァいと思つて美琴を頼るけど。

んで、冒頭のやつはテスト初日の前日。

もちろん美琴の家に駆け込んだよ、毎日。

「ケンジく、ガリガリ君」

「ないって」

「なんてやつだ、世界史を赤点レーダーから逃れることができたのは俺のおかげだぜ」

「なら、あんたは一桁に入れたお礼として何か奢ってくれるわよね。パフェとか」

「またも藪蛇！」

結局、美琴大先生にパフェを奢らされたよorz

もう六月か、梅雨っただけでもウザいのに祭日が0の最悪の月だぜ。
ああ・・・学校サボりてー！。

第4話 中間考査、これも戦いである(後書き)

ご意見・ご感想などお待ちしております。

番外編 ケンジ君のついてないようすでついでに1日(前書き)

今回の主役はケンジくんです。

番外編 ケンジ君のついてないようについてる1日

俺の名前はケンジ、この町のゲーセンで俺の名前を知らないやつは
いない……（結構いる）

俺はこの町のゲーセンでトップをとる……（主にメダル系で）
そのためならどんな犠牲もいとわない……（お小遣いとか）

時間帯 中間テストが終わってみんなほつとしているところ

きたぜこの解放感……今ならなんだってできる！ゲーセンでとっ
てきたファイギュアを部屋に飾ることだってできる！

「ケンジくガリガリ君く」

こいつの名前は草薙光一^{くさなぎみつひさ}、俺の親友だ。

授業中が睡眠時間という共通点もあり、入学早々仲良くなった。
ちなみに、よく飯やガリガリ君を奢らされる。

「ないって」

ねえよそんなもん！今あつたら確実に溶けてるだろ！それともあれ
か帰りのコンビニで買ってくれってか、まあ、たかが62円ぐらい
別にいいよ……いろいろ世話なってるし……でもな、でもだぞ、
この前お前におごったせいでゲーセンのスロットやってたらポーナ
ス確定画面で金尽きたわああああ！！！！！！

「また今度おごってやるよ」

「ちえ」

「ケンジはこれからゲーセン？」

光一の幼なじみで同じクラスの白川美琴しろがわみことが訊ねてくる。

「もちろん」

ゲーセンに行かないなんて選択肢は俺には無い。

「よく行くなー」

「あのゲーセン学校から近いからね」

呆れた声で話に加わってくるのは佐天涼子さてんりょうこ、光一と白川さんの中学時代からの同級生で同じクラス。

「今日は万枚出す気でいくぜ！それじゃ！」

ゲーセンが俺を待っている！

「行っちゃった」

「そんなに出してどうすんのよ？」

「さあ（笑）」

「あ・・・」

「どうしたの遷？」

「（あそこは今日確か唯も行くって言ったような・・・ま、関係ないか）ううん、なんでもない」

場所 ゲーセン

来た、永遠のように長かった・・・だがしかし、今日は出す・・・吐かせてやる・・・あそこに表示されている枚数・・・3万枚・・・！！

よし、勝負だ・・・このモンスターマシン・・・スターホースプログラムで！

説明しよう

スターホースプログラムとはゲームセンターのメダルで遊べる競馬シミュレーションゲームである。単勝、馬連、複勝、ワイド、ライドと馬券システムも充実しているが、それだけではない、このゲーム機ではメダルを使って自分オリジナルの競走馬を作ることができるのだ。

そう、俺はこの日のために血のにじむような努力をした・・・来る日も来る日も馬をプール漬けにしてさらにそれを配合、ついに最強馬を完成させた・・・！！

説明しよう

プール漬けとは1頭の馬をレースに出さず、調教メニューにあるプールの水をひたすら繰り返すという作業である。こうして引退した馬同

士を掛け合わせることによって最強馬が完成するという法則があるのだ。しかし、それには相当量のメダルと時間が必要となる。最低でも1頭につき1200枚はかかってしまう・・・1200枚・・・現在の貨幣価値に換算すると約1万円！

しかしケンジはその枚数を得意のスロットですでに稼いでいた。その費用わずか千円・・・！
うん？なんで高校生がスロット得意かって？なんででしょうね？

よし、準備は完璧だ。行って来い！ミラクルケンゾゴ

*育てた馬に好きな名前を付けることができます

・・・ジャックポットである3万枚をとるには1頭の馬で皐月賞、日本ダービー、菊花賞をとらなくてはならない、そしてどのレースもとれるチャンスは1回だけだ・・・。

いくら準備が完璧でも、それを成し遂げるには運が必要だ・・・。

いや行ける、今の俺なら・・・今日は・・・勝つ！

アナウンス：1レース目、皐月賞

ナレーター：さあ今第4コーナーを回りました おおと！外からミラクルケンゾゴ、強烈な勢いで追い込んでくるー！

「いつけええええ！」

ナレーター：皐月賞を制したのはミラクルケンゾゴ

よし！まず1勝。

アナウンス：2レース目〱日本ダービー〱

ナレーター：東京競馬場最後の直線！先頭は依然ミラクルケンゾゴ
ー！ミラクルケンゾゴー！

いける！

ナレーター：勝ったのはミラクルケンゾゴー！2冠達成です。

「じゃあー！」

ついにここまでできた、あと1勝、あと1勝だ……！

最終レース〱菊花賞〱

このレースに勝てば3万枚……いける……この流れ……必ず
来る！

ナレーター：ただいまより菊花賞の投票受付を開催します。

単勝1・6倍……圧倒的強さじゃないか！よし、行って来い！

テーテテツテテー テツテツテテテー（ファンファーレね）
ガシャツ！（ゲートが開く音）

ナレーター：さあ各馬いっせいにスタートしました。

勝て・・・勝つしかねえだろここは・・・！

ナレーター：ただいまのレースの結果1着・・・

ドクン

ドクン

ドクン

ナレーター：8番ナリタブライアン

・・・

・・・

・・・

・・・

「兄ちゃんおしかったなー」

隣にいたおじさんに慰められた。

「うん、あ、はい・・・」

負けたああああああああああああああああああ

「はあ・・・」

ここまでできて負けるなんて・・・

「帰る・・・」

また今度チャンスがあるだろ・・・

ゲーセンから帰ろうとしているとき、

「ううとれない」

「？」

「もう少しなのにな」

あそこいるのはうちの学校の・・・誰だ？

UFOキャッチャーか、得意ってわけじゃないけど、まあまあでき
るほうかな。

「よーしもう一回だ」

・・・

「ううとれない」

ありゃだめだな、あのままじゃ一生とれん・・・。

「くーもう一回」

「ま、待て」

気づけば俺は声をかけていた。

「うん？」

あーやべ、なんかつい声かけてしまった。

「あ、ケンジ君だ」

「あれ、俺のこと知ってんの？」

「澪ちゃんの友達のケンジ君でしょ」

「いつもこのゲーセンにいるって言ってた」

「へーそっか」

「私は相沢唯^{あいざわゆい}。よろしくね」

「あ、ああこちらこそ」

「何か私に用？」

「え、あ、ああー、えっとなんだー その人形欲しいの？」

「うん！」

満面の笑顔で返されてしまった。

景品を試してみる。

なんだこのペコちゃんみたいな顔したカエルは……。

「私このぬいぐるみ集めてるんだ」

「そ、そうか」

「でも、今のまんまじゃ それとれないぞ」

そう、この状態だと普通にやれば絶対に取れない。

「あきらかにアームの力が足りてない」

「え、うそー」

「まあ、もしとりたかったら、アームの爪をつかって……（省略）

……」

「じゃ がんばれよ」

俺は帰ろうとする。

「ちょっと待っておくんなましー！」

「えっ？」

「うるうる」

なっ、なんだこのカワイイ生き物は……。

「・・・とねって?」

「キラキラ」

うーん、まあいつか今日金使ってないし。

「わかったよ、でも俺もとれるかわかんないよ」

「ほんとう!ありがとうー!」

よっしゃ、ちょっとやってみるか!

ってこれ、1プレイ200円じゃねえかあああああ!

6プレイ目

ケンジ、1回でとるのは無理と判断 500円で3プレイを2回目

おいおい見ず知らずの人のために千円もつかっちゃてるよ。

ストン!

「あ」

「とれたー!」

「ふう」

「ありがとうケンジ君!」

番外編 ケンジ君のついてないようについてる1日(後書き)

ケンジくんのモデルである友人が執筆し、私が少々手直ししました
(1時間ぐらいで)。

第5話 梅雨はジメジメして嫌いです(前書き)

前回より長いのですが、どうにか短期間(?)で書きあげることができました。まあ、一番進んだのは昨日の講義中なんですけどねw
講義ですか?まったく聞いてませんでした。そんなわけで、回想での対インドラ戦・・・お楽しみ下さい。

第5話 梅雨はジメジメして嫌いです

六月だ。

完全に梅雨だぜ。

ジメジメして気持ち悪いんですけど。

一週間・・・七日間の内五日が雨とかマジありえねえ。

しかも六月は祭日無し。・・・氏ねよ。

それでも休まずにちゃんと学校に通ってる俺って偉くね？

とか言ったら梓には可哀想な人を見る目で見られ、美琴からはチヨークスリーパーをくらった。アテナも「こんなのに妾は負けたのか」と意気消沈してるし。

梓と美琴曰く、『それは誰でも同じ』とのことだが、病弱な俺を他の人と一緒にしないでほしい今日この頃だ。

えっ？魔王である俺が病気にかかるわけないって？

それがかかるんだよ。主に精神病とかいうやつに。

『眠い眠い病』とか『家から出たらお腹が痛くなる病』とかその最たるものだぜ。

・・・おいそこ、可哀想な人を見る目で俺を見るんじゃないやねえ！

話は戻るが、この雨の中週五日登校というのは俺の精神がもたない。週四日登校とか憧れるわ。

それもこれも全部あの空に偉そうに浮かんでる雨雲のせいだ！

俺の権能で雨雲吹っ飛ばしてやるうか？

まあ、俺もねTPOぐらいわきまえてるからそんなことしないけどね。

つまり、そんな気分ってことだ。

・・・ああ、なんもやる気起きねえし。

そういえば、一年前もこんな感じだったな。

六月は梅雨で鬱になり、八月は暑さで鬱になる。ついでに、冬は寒

さで鬱になる。

毎年のことだ。そしてこれからもそれは変わらないだろう。だが、去年の今と今年の今、俺を取り巻く状況はガラツと変わったな。

俺がこの世界に足を踏み入れたのは去年の八月だったが、全身をどつぷり浸かったのは・・・今年の三月。

・・・

そうか、あれから『もつ』三ヶ月になるのか。

それとも『まだ』と言つべきなのか・・・

* * *

〈回想〉

中学校を卒業し、中学生でも高校生でもないという微妙な時期の三月（正確には中学生扱いだが）。

アメリカに海外赴任している両親から、お前も一度は外国・・・とりあえずイタリアへでも行ってみなさいとか言われた。

両親の頭の中でどういう過程を経てイタリアになったのかについては、突っ込んだら負けの部類だ。考えるだけ無駄だ。

外国？やだよ面倒だし。俺家でゴロゴロしてる方が楽しいもん。行くんなら梓でよくね？

とか提案したら、両親からは「それなら梓と二人で行きなさい」と、梓からは「私部活あるから無理です」と返された。

俺は一縷の望みを賭けて「俺は嫌だ」はつきり言つと、「あんたに拒否権無いから。小遣いを半分にされなくなかつたら逃げ」このこ

と。

おお、神は死んだorz

もちろん、無条件降伏などする俺では無い。

交渉の結果、半年間小遣い倍額という譲歩を引き出したぜ。そこま
でして俺のぐーたら生活を邪魔したいのか？

もつとも、このイタリア旅行が『半年間の小遣い倍額』とは割に合
わない命がけの旅行になるのだが、この時点では神ならぬ身ならば
知る由もなかった。

さて、飛行機で12時間もかけてイタリアへ来た俺だったが、正直
なにやればいいのかさっぱりわからん。

いやね、観光すればいいってのは分かるんだよ。適当に歴史的建造
物でも見て回って写メにでもとっとけばいいんだろ？

なぜか知らんけどイタリア語できるし、そこらへんに不自由はない
んだけどさ。

正直、歴史的建造物みてもふーん程度の感想しか沸かねえんだわ。

修学旅行のときもそんな感じだったしな。

俺は歴史好きだが、だからといって実際に見て感慨がわくわけじゃ
あねえんだ。

無理やり行かされたこともあって、むしろぶっ壊してやりたい気分
なんだがな・・・

ん？

つてなんか右腕が疼^{うず}いてきたぞ。

邪気眼か？邪気眼なのか？既に厨二はとっくに過ぎているぞ。あれ
か？遅れてきた厨二病か？悪い冗談だぜ。

・・・

ふゝ、ようやく治まったわ邪気眼（？）。
いったい何だったんだ？

帰ったら医者に診てもらったほうがいいのかな。
でも何て説明すりゃいいんだ？

邪気眼ですとか言ったら痛い人を見る目で見られて精神科医行かされそうだしな。

それに、大爆笑する美琴の姿が目には浮かぶ。やっぱり却下だな。

あゝだり。

今日はもう観光する気分じゃねえわ。

ホテルにでも行ってさっさと寝るかね。

* * *

その夜、カーテン越しから窓の外がピカピカ光るので俺は眼を覚ました。

いったい何なんだとカーテンを開けると、そこに信じられない光景があった。

あ・・・ありのままに今起こった事を話すぜ！

凄まじい轟音とともに雷光が空を覆っていた。

雷光が七で空が三だ。

な・・・何を言っているのかわからなーと思うが、俺も何があったのか分からなかった・・・。

精神が逝きそうだったぜ。

雷だとか稲妻だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・。

何故、この光景をみて外へ出たのかは分からない。
俺は何かに引き寄せられるように雷光の光源へと向かった。

・・・

「どうかこれ以上の狼藉はおやめ下さい。皆が困っております」

お、あれは・・・美少女発見！

「人間如きが我に願い事をするか。笑止！」

っ！？

あの美少女の前にいるやつはいったい何だ！？

神々しさを兼ね備えた禍々しい何かがそこに存在した。

そして、その禍々しい存在は美少女を害そうとしている。

「危ない！」

俺は咄嗟に飛び出して美少女を引き寄せた。

直後、美少女が元いた位置に雷撃が着弾する。

「おい、大丈夫か？」

「ありがとう。・・・あなたは？」

「俺は草薙光一だ。で、どういう状況？あいつは何だ？」

「私はアリシア・クリエスト。あれは神と呼ばれる存在、名はインドラ」

神だと？

賽銭入れても何の御利益もくれねーケチなあのか？

.....

インドラ、確かインドの神で仏教圏じゃ帝釈天だったな。たくつ、ここはインドでも仏教圏でもねえっつーの。

相手はこつちを虫ケラ程度にしか見ていない。なら、逃げるか……いや、無理だな。

そもそもアリシアに逃げる選択肢がなさそうだ。

俺だけ逃げるわけにもいかんしな。は、我ながら損な性格してるわ。だから家で引き籠ってるのが一番安全だというのに。

また右腕が疼き震えてくる。

ちっ、こんな時に。

と、いきなり日本刀らしき剣が俺の手に現れた。

なんだこりゃ？

天叢雲剣……そんな名が頭に浮かんでくる。

天叢雲剣といえば別名草薙の剣といって、スサノオが八岐大蛇を倒したときに尾から出てきたという、三種の神器の一つであり日本で最も有名な伝説の神剣のはずなんだが……。

これがそうなのか？

だとすれば天皇家にあるのは偽物ということになるが……。

それに、何でこれが俺の腕に突然沸いて出るんだ？

心当たりがあるとすれば・・・去年の八月のあの頭が八つあるクソ蛇か。

あれが八岐大蛇だったとすれば辻褃が合いそうだが・・・
まあ、そんなことはどうでもいい。

とりあえず今はこの危機をどうやって乗り切るかだ。

見ればアリシアは茫然としており、インドラは面白いものを見たという顔だ。

「ほお、貴様神殺しか。我ら神を殺めし忌々しきやつよのう」

神殺しだと？俺はそんなことした覚えはねえぞ。

見れば、アリシアも信じられないものを見る目で俺を見ている。

「ここで会ったのも天命、我が打ち滅ぼしてくれるわ！」

インドラはまるで小手調べとでもいうように指先から雷撃を放つ。

だが、光の速度であるにも関わらず俺の体は反応し天叢雲剣を前に突き出すと、雷撃は天叢雲剣へと吸収された。

「なるほどの、我の雷を防ぐか。ならばこれはどうかの？」

風が唸り、すさまじい圧力の暴風に吹き飛ばされる。

「ぐっ・・・」

次に、指先から放たれる雷撃が俺を打ち据える。

「がぁ・・・」

痛い！

しかし、不思議と耐えることができた。

.....

おかしい、なぜ俺はこの雷撃に耐えられる？普通なら良くて気絶のはずだ。

「どうした、反撃せぬのか？」

ちっ、舐めやがって。

とはいえ、力の差は歴然・・・ていうかただの一般人にどうしろと？神殺し？知るか！

!!!!

突然、俺の頭に炎のイメージが浮かび上がる。

あゝもっ、こっとなったら破れかぶれだ。

厨二病とか言ってられる状況じゃない。

俺は天叢雲剣をインドラへと向け、炎を放つ姿をイメージする。

すると、天叢雲剣より炎の槍が吹き出し、インドラへと一直線に向かった。

インドラは手に雷を溜め炎の槍を受け止める。

「やるではないか。ならば、これはどうかの？」

インドラは、おそらくヴァジュラであろう武器を取りだし、俺へ向けて振るう。

轟音が響き、雷の奔流がヴァジュラより放たれる。

つ!!!

今までより遥かに大きい。

こりゃ駄目だなと頭の中で半分諦めかけたとき、アリシアがどこから出したのか楯をにかけて俺を守ってくれた。

「ありがとう、助かった」

天叢雲剣の先から火炎放射を繰り出しインドラを攻撃するが、どうやらあまり効果はないみたいである。

「ふむ、よく戦ったがそろそろ終わりかの」

インドラの持つヴァジュラから雷が俺めがけて疾走する。

「調子に、のるな！」

インドラの放つ極大の雷を天叢雲剣で受け止め、撥ね返す。

その威力はインドラの放つ雷撃を上回っていた。

おそらくだが、今までに天叢雲剣が吸収していた雷撃も一緒に放出していたのだろう。

「むっ!?!」

結果として、雷霆神であるインドラにはそれほどの効果は無かった。だが、わずかな隙をつくるには十分であった。

「剣より顕現せし炎の蛇よ、集い纏いて敵を討たん」

あ？なんか勝手に呪文（？）みたいなの唱えちまった。
まあいいや。

天叢雲剣より蛇の姿を模った八つの炎が顕現する。

それはまるで八岐大蛇を再現するような炎蛇であった。

その八つの炎蛇が天叢雲剣に絡みつく。

俺は炎を纏った天叢雲剣でインドラを切りつけた。

さすがは神だけあって切断するには遠く至らなかったが、傷口から炎がインドラを侵食し、すぐに全身へと燃え広がる。

轟炎はインドラを燃やしつくしその存在を消滅させた。

ん？

何かが俺の体に入ってくる気がする。

この感じは、以前八岐大蛇が消滅したときに感じたものと同じだ。

「これ・・・は・・・」

「おそらく、草薙さまがインドラ神を殺めたことによってその権能を篡奪されたんだと思います」

「神殺しに権能の篡奪ね・・・もしかしてあのときもそうだったのか？」

あのときはただ石ころをぶつけただけだったんだけどな。
八岐大蛇弱すぎね？

「て言うかアリシアって何者？」

「私はイタリアの魔術結社である白光聖十字はくこうせいじゅうじ所属の大騎士です。草薙さまは・・・日本人ですよね？」

「そうだよ。あと、俺の名前は光一でいいよ」

「わかりました。それにしても、光一さまのような魔王が誕生していたというのは初耳です」

「さまはいらないよ。で、魔王？」

「神を殺めし者・・・つまり神殺しのことを魔王と呼びます。光一さま・・・光一はインドラ神を殺めたので正真正銘の魔王です。もともと、インドラ神以前にも別の神を殺めていたようですが・・・」
そんなこと言われてもな、実感ないし。

「では、私アリシア・クリエストは我が主、草薙光一に生涯お仕えすることをここに宣言します」

は？今何と？

「あなたは私の命を救っていただきました。その恩を返すには当然のことです」

「いやいや、俺も助けられたし」

「いえ、神と魔王は圧倒的な魔法耐性を誇っています。光一なら私が防がなくても大丈夫だったはずですよ」

「分かった、なら友達という対等な関係にしよう・・・な」

チクショー俺のチキン！

ここはチャンスだったのに・・・ま、いっか。

主従の関係なんて堅苦しいだけだしな。

どうにかアリシアに了承させた後、俺はホテルへと戻った。

翌日、アリシアにイタリアを案内してもらって、これってデートじゃね？と嬉しがっていた俺がいた。

そんなこんなで数日イタリアを観光し（もちろんアリシアと一緒に）、白光聖十字とやらの幹部と会ったあと、俺は飛行機で日本への帰路に就いた。

～回想終了～

* * *

.....

ああ、眠い。

睡眠学習って実用化されないのかな？

アリシアとはあれから電話やメールでのやり取りをよくしている。

そこ、「リア充氏ね」とか言わない。

マジでインドラとの戦いキツかったんだからな！

さて、あれから三ヶ月。

五月にはもうアテナと戦うことになったしな。

このままじゃ神が現れることに魔王として戦わされそうで怖いわ。
これってニートのやることじゃないよね？

はあく俺の人生どうなるのかね。

第5話 梅雨はジメジメして嫌いです(後書き)

ご意見・ご感想お待ちしております。

第6話 夏休みの前には水泳という天国と期末という地獄がある(前書き)

ようやく仕上がった。難産でした・・・主に私のやる気的な理由で。

第6話 夏休みの前には水泳という天国と期末という地獄がある

七月、それは学生たちのテンションをうpさせるには十分な季節である。

当然、外は暑い。

だが、それを補って十分な光景がそこにはあった。

科目：体育

授業名：水泳

そう目の前に広がるのはスク水姿の女子たちである。

この学校では未だにスク水が学校指定水着として生き延びていたのである。

そう、ここは天国にして楽園……。

「ってのは大袈裟なんだけどね」

「幼女、幼女」

「私の胸を見ながら言うな！」

「幼女、幼女」

「そうだよコウ。そんな目で見るのは感心しないな」

「幼女、幼女」

「いやでもさ、あれと比べると・・・」

俺は呉羽と澪ちゃんに視線を向けながら言う。

彼女たちの胸はそこに大きく、かといって無駄に大き過ぎるわけでもない。

辛うじて貧乳ではないという程度的美琴とは格が違つのである。

涼子ちゃんは・・・まあ、普通だな。

「幼女、幼女」

「あんたはとりあえず一回死になさい！」

怒つた美琴にポッコポコにされる。

「幼女、幼女」

ああ、大鳳から零戦隊が発進していく・・・。

あつ、大和の46センチ砲がアイオワに命中した・・・しかも弾薬庫に直撃だ。

「幼女、幼女」

「・・・あんた絶対今くだらないこと考えてるでしょ」

おおっ、心を読まれた。

魔王の俺より人間離れしてないか美琴よ。

「幼女、幼女」

まったく、もっと心にゆとりを持たばいいのに・・・。

せつかくの水泳だぞ。
もっと楽しまないと（視るのを）。

「幼女、幼女ー」

あ、（視て）楽しめるのは男だけか。
まゝ楽しめるのは今だけなんだけどね。
あと1週間後には期末試験があるし。

「幼女、幼女ー」

考えるだけで鬱になるわー。

「幼女、幼女ー」

ん？

さつきからなんか変な奴がいるな・・・。

あいつは・・・隣のクラスのやつか。

っ！かこんな場所に幼女なんて・・・いたな、隣のクラスの宮間さん。

確かに見た目はロリだ。

てことは見た目さえロリなら見境なしかよ！

あいつみたいなのが将来犯罪に走るんだよな。

あれ？

もしかしてアテナをお持ち帰りした俺もあいつと同類なのか？

・・・

ま、まあ深く考えないようにしよう。

* * *

「というわけで、助けてください美琴大先生」

はい、今日は期末試験の前日になります。

今回もまったく何もしてないぜ！

そりゃもう昨日まで遊び通しましたよ。

梓が何か言ってた気がするけどキコエナ〜イって感じでスルーしてました。

「またか！次ぎからはちゃんと勉強しとけて私言ってたわよね？」

そういえばそんなこと言ってたような……。

「俺の記憶力を舐めるなよ美琴！」

そんなの覚えてるわけねえじゃん。

俺の脳味噌はデリケートなんだ。

「……あんだ死にたいわけ？」

おおお、怖えええー！

修羅だ修羅がいる！

このプレッシャーはアテナやインドラを遥かに凌駕しているぞ。

俺には神や魔王よりお前のほうが怖いよ……。

お前本当に人間か？

「はい、美琴大先生に質問があります」

「何よ？」

「美琴大先生は本当に人間ですか？」

・・・

「へえ、そんなに死にたいんだ？」

コレハヤバイ！

「じゃあ今すぐ地獄に送ってあげるわよ！」

・・・

その後、俺は美琴にグロッキー状態にされた。

* * *

さて、今は歴史の試験中だ。

まだ時間が半分以上残ってるけどもう終わっちゃったぜ。

他の科目は・・・まああれだが、歴史に限れば余裕すぎる。
あゝ暇だ。

何か考え事でもしてよ。

・・・

俺の権能だが、八岐大蛇から奪ったのが『八蛇炎剣』、インドラから奪ったのが『風雨雷霆』と呼ばれているらしい。
まあ、アテナ戦のとき（小嶋さんだっけ？）にモロ見られてたからな。

それとも、あの戦い他にも観戦者がいたのか？

権能名なんかカツコ良くな？とか思ってしまったのは仕方ないことだと思う。

ちょ、そんな厨二病患者を見る目で見ないでくれ。

俺と同じ立場になれば嫌でも分かるさ。

あーマジ寝みい。

三大欲求と言うが、俺の中では睡眠欲は他の二つの追隨を許さないほど高いからな。

昔から授業とテストは睡眠時間って言うしね。

何？そんなの言わないって？

俺の中ではそうなんだよ。

もう何個目覚まし壊したことやら。

朝俺の睡眠を邪魔する愚か者に天罰が下るのは仕方ないだろ？
というか、午前中に始まる学校が悪いんだ。

買い換えた目覚ましの代金請求したいぐらいだぜ。

・・・そろそろ寝るかね。

* * *

期末試験の結果だが、順位は上から順に、漣（2位）、美琴（4位）、呉羽（5位）、俺（10位）、涼子（142位）、ケンジ（148位）だった。

順位の変動は誤差の範囲内だな。

美琴と涼子ちゃんは下がったことを悔しがっているが・・・それにしても漣ちゃんはさすがだなー。

ま、別に俺は何位でもいいんだけどね。赤点リーダーに引っ掛からなければ。

大学でならともかく高校で留年とか勘弁してほしいわ。

って俺の成績なら大丈夫・・・だよな？

何て言うか、俺魔王になる前まで赤点リーダーに引っ掛かるギリギリを飛行してた劣等生だったじゃん。

今でも成績見るの結構ビビるんだよ。

テストも終わって結果も出たことだし、約束どおりケンジにガリガリくん奢って貰ってから帰って寝るかな。

第6話 夏休みの前には水泳という天国と期末という地獄がある(後書き)

ご意見・ご感想お待ちしております。

第7話 シチリア島に眠る巨神（前書き）

最近大学に行くのが嫌になってきている・・・。

第7話 シチリア島に眠る巨神

夏休みに入ってすぐ、俺はイタリア行きの飛行機に乗っている。
どうしてかって？

アリシアに呼び出されたからさ。

アリシア・クリエスト。

イタリアの魔術結社はくしつせいじょう白光聖十字の大騎士であり俺の嫁候補（自称）だ。

それで呼び出された理由だが、シチリア島に尋常ではない神力が集まっているとのこと。

つまり、近くシチリア島に神が降臨する可能性が高いってことだ。
もしくは封印が解けるかだな。

はあ、何でいつもいつも俺のところに面倒事が舞い込むかね。

イタリアには確か俺のご同類がいるはずなんだが・・・どうやらバカンスに行ってるらしく行方不明らしい。

ちゃんと仕事しろよと大声で突っ込みたいな。

え？

俺も似たようなもんだって？

いやさ、俺は何だかんだでちゃんとやってる（やらされてる）わけよ。

ほら、俺って押しに弱いじゃん。

そこで、美少女投入とかされると断れないわけだな。

・・・

おいおい、そんな目で見るなよ。
オマイらだって俺と同じ状態ならそうなるから、絶対。

ま、まあそんなことは置いといてだ。
前にも話したと思うが、日本らイタリアへは飛行機で12時間。
つまり半日もかかるわけだ。

何を言いたいかというと、暇なんだよ。
やることねえんだよ。

暇つぶしの道具？
んなの全部使い切ったわ。

これでも6時間も時間稼いだんだぜ。
俺は自分を褒めてあげたいよ。

現時点での俺の手札はあと1枚。
しゃーねえ、こいつを切るしかないようだな。

最後の切り札：睡眠

はい、というわけで俺は寝ます。

おやすみ。

* * *

只今、イタリアのシチリア島のエトナに来ております。
アリシアとはとっくに合流しましたよ。

ん？

なんかアリシアが不思議なものを見るような目で俺を見てる。なん
で？

「光一、その腕輪から神力を感じるのですが・・・」

ああ、なるほど。

「この腕輪か？これはこっちに行く前にアテナからもらった。妾の
力が必要になる気がするから持っておけとか何とか言ってたけど」

「アテナですか？確かあなたが日本で倒したと聞いてますが」

「ああ、その後家にお持ち帰りしちゃったんだよね」

俺の言葉にアリシアは最初驚愕し、次第に犯罪者を見る目つきにな
っていった。

俺のライフ（精神的な）がどんどん減っていく。

！！！！

突如、今まで集まり続けていた神力が急激に高まっていく。
強大な神力が収束していく先はエトナ火山の方だ。

「これは・・・」

「光一、急いで！」

俺とアリシアは急いでエトナ火山に向かうと、そこには、天に届くような巨神がいた。

巨神は緋い眼を輝かせ、肩から何対もの蛇を生やし、腿から下は巨大な蛇がとぐるを巻いている。

「私の目覚めに立ち会うとは不運なことよな、矮小なるものどもよ。……ん？ 貴様神殺しか。なるほど、我が目覚めるのは承知の上と
いうことが」

そう言つて、巨神は不敵に笑う。

「だったら、どうする？」

ここで気押されてはいけない。

「くくつ、神と神殺しが会ったならやることは一つだ。お主とて分かつているだろ？ 神殺しよ」

やっぱりこいつもかよ。

神様ってのは何でどういつもこいつも戦闘狂なんだ。

これまで同様、戦闘を避けるなんて不可能だろう。

それに、仮に避けれたとしてもエトナの町……いや、シチリア島全土がどうなるか分からない。

悪気が有ろうと無かろうと、神がその力を振るうだけで人間にとっては脅威の天災となる。

俺がここに呼ばれたのもだからこそだ。

「ち、仕方ない」

俺は小手調べに天叢雲剣から炎を巨神に向け放ってみる。

が、

「む、お主の殺めた神は我が血族のものか。運が悪かったな」

巨神はそう言っ^て拳を握りしめる。

すると、炎は霧消してしまった。

「なっ、なに!？」

炎が打ち消されただと!

どういうことだ?

「それなら」

俺は天叢雲剣で斬りかかるが、今度は天叢雲剣ごと消される。

「どづいつことだ!？」

つまりは八岐大蛇の権能そのものが効かないということ。

と、そこでアリシアが、

「打ち消された八岐大蛇の権能、シチリア島、封印された巨神……
ま、まさか!!!」

「ほづ、どつやら我の名に思い立ったらしいの」

「御身の名はエンケラドス。またの名をテュポーン」

「ふはは、そうとも我はエンケラドス。もつとも、テュポーンの名の方がちまたには通っているがな。そちらで呼ぶがいい」

エンケラドス・・・テュポーンだと!?

確かテュポーンはギリシャ神話に出てくる暴風や台風の神で不死の魔神。

対してエンケラドスはギリシャ神話に登場する巨人^{ギガンテス}だったはず。

なら、なんでこの二柱が同一なんだ？

テュポーンはここシチリア島のエトナ火山の下敷きにされゼウスに封印された。

エンケラドスはシチリア島を投げつけられて・・・。

!!!

なるほど、だからテュポーン⇨エンケラドスなのか。
なるほどな。

だが、八岐大蛇の権能が打ち消されるのは何故だ？
こいつと何の関係がある？

「ほれ、余所見している暇はないぞ！」

ONE PIECEのサカズキよろしく球状のマグマを投げつけてくるが、俺は間一髪それをかわす。

そういえばエトナ火山の噴火はこいつのせいだって言われてるんだ
ったな。

「ならこいつで」

俺はテュポーンに暴風雨を叩きつけるが、

「甘いわ」

同じく暴風によって相殺される。

いや、威力はあちらが上回っている。

「ちっ、だめか」

あっちは台風、こちらは嵐。

同じ暴風の権能と言っても規模に差が有りすぎる。

なら俺に残された手は雷しか無いってことか。

しかし奴は火山の業火にすら耐える化け物。

生半可な雷が通用するとは思えないが、俺には他に手が無い。

ダメ元で雷を放つが、案の定、テュポーンはケロリとしている。

「くだらぬ、失せい！」

テュポーンはそう言い放つと緋^{あか}い眼をさらに緋^{あか}く輝かせ、目から火
を放ってくる。それもご丁寧に収束までして。

俺はどうにそれを雷撃で相殺するが、已然としてやつの優位性に変

わりはない。

くそっ、こいつは手詰まりだ。

それに比べてあいつは好き放題にマグマを降らせてきやがる。

と、俺の周囲にマグマの玉が着弾し、逃げ道が塞がれた。

そこへ追い撃ちのようにマグマが降ってくる。

マズい、これは直撃する！

「聖なる光よ、我が愛しき者を守りたまえ」

アリシアが呪文のようなものを唱えると、光が俺を包み込むように楯となって拡がり、俺の身を守る。

「光一、九つの頭を持つ怪物ヒュドラーはテュポーンの子です。そして、ヒュドラーの首の数には5〜100までの異説があります」

なるほど、ヒュドラーは八岐大蛇か。これで繋がった。

やつも言ってたじゃないか「お主の殺めた神は我が血族のものか」と。

なら子であるヒュドラー（八岐大蛇）の力が父であるやつに通じなかったのも道理だ。

さて、八岐大蛇の権能が通じかない理由は分かったが、根本的な解決には何一つなっていない。

「光よ」

アリシアが収束した光を天から落としマグマ玉を破壊してくれる。
だが、アリシアの呪力は俺やテュポーンには遠く及ばない。
遠からず限界が来るだろう。

「ち、やるしかねえか！」

某マンガを見て思いついたこいつをくらわせてやる！

「くらいやがれデカブツ、『雷の暴風』」

ありったけの雷を込めた暴風をテュポーンに向けて放つ。

感じとしては、『ネギま！』の『雷の暴風』とほぼ同じ。
というか、まんまだ。

「ふん、その程度では・・・ぬ！？貴様、その腕輪は！」

アテナからもらった指輪が輝くと、テュポーンの神力がみるみる低下していく。

「迂闊だったな、巨人エンケラドスがギガントマキアーにおいて敗れた相手、それがアテナだ」

最高だぜアテナ。

最近家でゴロゴロしてて神としての威厳が俺の中で失われつつあったけど、さすがは智慧の女神。

テュポーンを封じたゼウス、エンケラドスに勝利したゼウスの娘アテナ、そしてアテナを倒した俺。

すべてのピースが一つとなり、雷を纏った暴風が不死の魔神テュポーンに直撃する。

「ぐおお、バカな！」

巨神が暴風に呑み込まれていく。

力を使い果たした俺は、そこで意識を途絶えた。

* * *

目が覚めると、そこは知らない天井だった。

横にはアリシアが心配そうな眼差しで俺を見つめている。

「気がつきましたか？」

「ああ」

どうやら、俺が倒れてから丸二日経っただらしい。

どおりで目覚めが良かったわけだ。そりゃ、48時間も寝ればな。

「それで、テュポーンは？」

「テュポーンはあなたが打ち取りました。これでシチリア島がテュポーンの起こす天災に巻き込まれることはないでしょう」

「そうか、それは良かった」

本来なら、こんな面倒かつ危険なことはお断りなただけだな。
なぜかある種の達成感を感じる。

「まだ本調子じゃないな」

「そうかもしれませんがね」

そう言って微笑むアリシア。

.....

つて！

俺いつの間にかこっちの世界に足どころか腹ぐらいまで浸かってないか？

（首まで浸かっているとは認めたくない）

カムバック俺のニート生活。

その後、イタリアの魔王らしいサルバトーレ・ドニとかいうバカが来て会うなり勝負を仕掛けてきたので、テンションがガクッと下がった俺は天叢雲剣を帯電させこのバカをサルバトーレ・ドニレールガンの弾よろしく地中海のど真ん中に弾き飛ばしてやった。

ザマア！！！！

第7話 シチリア島に眠る巨神（後書き）

アリシアのキャラが完全に固まらない・・・それにテュポーンはインドラとキャラ被ってるし。やっぱりオリキャラとか難しすぎる。

番外編 ケンジ君のついてなかったけどどうにかなった1日(前書き)

本編があまりに長い間投稿できてないので、番外編を投稿します。

本編は・・・11月中に・・・書けたら・・・いいな・・・。

番外編 ケンジ君のついてなかったけどどうにかなった1日

これは・・・ある夏の出来事・・・
ケンジという男の熱い熱いそして残念でやばそうになるけどなんと
かなる物語・・・

南4局オーラス

トップとの差は15000点

そして今、1つの勝負に決着がつく・・・。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・!?!?」

ハッタか・・・?

「ケンジさん、悪いなリーチだ・・・」

「へへ、望むところだ」

やつの待ちはおそらくピンズ!

しかしこのイーピンさえ通せば逆転可能な倍満テンパイだ・・・。
ここは勝負するっきゃねえ!!

「行くぜ!こっちもリーチだ!!」

ドクン！

ドクン！

ドクン！

「ふふふ、ケンジさんそいつだ・・・ロンー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・」

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・

「ですよねー」

「じゃあ練習はこれぐらいにして・・・」

「ケンジさんバカ言っちゃいけないよー。今日も1列譲ってもらおうか・・・」

「えー、まじかよ」

「おい、さっさと畳をどけちまえ」

「オッスー!!」

「ちよ、おま・・・」

「約束は約束ですからね」

説明しよう。

夏休みに入って部活に励むケンジ達柔道部。

そして同じ道場で練習する剣道部。

ある日、剣道部の部長西岡がケンジに道場の使用面積を賭けて勝負をしようとしてきた。

ケンジも望むところと言った感じで誘いに乗る。

勝負種目は・・・・・・・・・マージャン

麻雀格闘クラブ3段のケンジもこの種目に文句は無かった。

そして天と地を分ける麻雀バトルが始まったのであった。

そして今、柔道部の畳は縦に5枚が2列あるだけである。

「あーあ、こんなところをムツミに見つかったら・・・」

「なんじゃこりゃあああああああああああああああ！！！！」

見つかったかった

彼女の名前は四葉^{よつば}ムツミ。

柔道二段の実力者だ。

「あ、あれムツミさん！？どうしたの来るの早くない！？」

「いやーはやく練習したくて・・・じゃなくてー！！」

ちっ、誤魔化せなかったか。

「なにこれ！？畳2列しかないよ！？」

「そっすね」

「……………」

「……………」

「じゃストレッチから始めよっか」

「うん……って！ちが

うー！！」

失敗。

「どうしてこうなっちゃったの？怒らないから言ってみて？」

「まあなんていうか……………」

ケンジはこれまでのいきさつをムツミに話した。

「なにやってんだよー！！」

ムツミが近づいて来て…………。

「バカヤローー！！！！」

ポカポカ

ムツミはケンジの頭をポカポカなぐり始めた。

「いたい、いたい。怒らないって言ったじゃんかー」

「あ、そっか。ごめんなさい」

・・・なんて素直なやつなんだ。

「でもどうしよう、このままじゃ練習できないよ」

「確かにな・・・」

こんな状態じゃ練習なんてままならない。

「そこでだ、ムツミ。俺に名案があるんだ」

「なに？」

「もう1度マージャンで勝負する！」

「えーーーーー!? 頭の悪いケンジ君だときつとまた負けちゃうよ」

「おい、頭悪いとか言つなよ」

「悪いでしょ」

「俺だって学習してるんだよ」

「でもそれ生かせてないよね」

「これまでなんで俺が剣道部のやつらに負けてるかっていうと・・・
1対3でマージャンをやったからだ!!」 バカだろ

「やっぱりバカじゃない!」

「これは数的に負けて当たり前だ・・・。しかし、次は違う!」

「次も同じような気がするけど・・・」

「なぜならお前がいる!」

「えー!わたし!?!」

「ああ、どうだ?これで2対2、イーブンだ」

「た、確かに・・・。でもそれだけだと確実に勝てるわけじゃ・・・」

「いや勝てる!なぜならやつらは運を使い果たしているからだ!」

「え、どういうこと?」

「つまりやつらは俺との戦いでヒットポイントを消耗してるってこと
とき。そこで今体力全快のお前が戦えばどうなると思っ?」

「あ!楽勝だね!」

「だろっ」

ドヤ

「よしそうと決まれば!」

「うん!リベンジだね!」

・
・
・

・
・
・

・
・
・

そしてまたしても始まったマジャンバトル。
果たしてケンジの策はうまくいくのだろうか？

「西岡、次こそは勝たしてもらうぜ・・・!」

「ふ、性懲りもなく・・・2対2になったところで貴様らが勝てる
とは思えんな」

「ふふふ、今回は体力全快のムツミがいるんだぜ!負ける気がしね
えよ」

「おーーーー!」

「(体力?またわけのわからんことを・・・)とりあえず始めるぞ」

「かかってこいや!」

「お———!!」

・

・

・

・

・

・

・

・

・

「あれ、そういえば私マージャンのルール知らないや」

「……………?」

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

まさかの爆弾発言を得ての南4局オーラス。

「……………ロン、俺がトップで終わりだな」

「……………」

「……………」

「ま、まあ、約束だからな、畳はもらっていくぞ……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、畳はついに6枚まで減ってしまった・・・。

「・・・・・・・・うっうっう。わたし・・・ルール知らないの・・・忘れて
て・・・」

「うわーーーーーん」

「ごめんなさいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

まあ普通忘れないよな。

「ま、まあ落ち着け……。6畳だぞ、都会のほうに行けば広いほ
うさ……」

「うっうっう・・・・・・・・でもこれじゃ・・・・・・・・ほんとに練習できないよ……
」

「そうだな……」

これじゃムツミがあまりに可哀そうだ……。

しかたない……。あいつらに頼んでみるか……。

「心配するな。明日までにはどっにかしておくから」

「ほんとうっ……」

「ああ、だから今日は自主トレな」

「……………うん」

……………

一世代古い携帯電話を使ってケンジは電話をかけ始めた。

「あー、光ー？うん、明日」

……………

「あと……………美琴ちゃんと遷ちゃんも呼んでくれると助かる」

……………

「おう、サンキュウ」

* * *

翌日……………。

「ローン！！なあんだ、楽勝じゃん！！」

快調にとばす美琴ちゃん。

「ツモだな。えっとたしかこれは……………4000・2000！！！！」

順調に和了^{あが}っていく澁ちゃん。

「ぐぬぬぬ・・・（くそおケンジ・・・なぜこんな頭のいい友達がいるんだ！？）」

ケンジは光一や澁ちゃん、美琴に助っ人を依頼したのだった。

マージャンは運半分、実力半分。

この実力とはいかに効率よく役を構成し、的確に相手の待ちを読むことなどである。

つまり頭のいいやつはマージャンも強いということだ。

ここに成績が学年一桁クラスの上位二人がいるのだから剣道部のやつらは手も足も出ない。

「ケンジ、この畳はここでいいのか？」

「ああ、悪いな光一」

「別にいいって、ま、後でアイスぐらいおごれよ」

あれ、こいつ特に何もしてなくね？

せいぜい畳運んだだけだよな。

・・・まあいいか。

「わーっ たよ」

「（よし、逆転の手が入ったぞ！！）ここから逆転だ・・・リーチ
！！！」

「「ロン!?!」」

美琴ちゃんと澁ちゃんの声が重なる。

「なっ、なにいいいいいいいいいい!!?!?!?!」

「これで終わりかな」

「そのような。おい、ケンジ、畳全部とり返したよ!」

「おい、ありがとう!今度なんかおごるよ!」

「こんちわー……ってなんじゃこりゃあああああああああああああ
あああ!?!?!」

あ、ムツミが来た。

「本当に元に戻ってる!?!」

「だから任せとけて言っただろ」

「うん、言ってた……。ケンジ君でもしかしてすごい人なんじゃないの!」

「今頃気づいたか!」

まあ俺じゃなくて回りがすごいんだけどな。

「ま、畳も戻ったことだし練習するか!」

「うん！」

こうして、壊滅の危機にあった柔道場はすっかり元に戻った。

みなさんも賭けごとには十分注意しましょう。

ケンジ君のついてなかったけどどうにかなった1日 - 完 -

番外編 ケンジ君のついてなかったけどどうにかなった1日(後書き)

四葉ムツミは生徒会役員共の三葉ムツミがモデルとなっています。

第8話 ヴオバン襲来！（前書き）

よ、ようやく完成した。

就活なんて〜、就活なんて〜。

第8話 ヴォバン襲来!

どこの国にでもありそうな、高層ホテルのスイート。
その部屋の椅子に一人の老人が座っていた。

広い額と、深く窪んだ眼窩。

どこかの大学で教鞭を執っていると言われれば納得するであろう知的な容姿。

老人の名はサーシャ・デヤンスタール・ヴォバン。

世界中の魔術師たちから王、魔王と畏怖される存在の一人だった。

『ソドムの瞳』 『貪る群狼』 『疾風怒濤』 『死せる従僕の檻』。

シュトワルム・ウント・ドラング

彼が所有するという権能の数々を、欧州の魔術師で知らぬ者はいないだろう。

ヴォバンは手元の資料を見ながら一人ごちる。

「草薙光一……まさか、そのような若造が世に出ていたとはな」

その声は明晰で、知的ですらある。

「おもしろい、このヴォバンの飢えと渴きを何処まで潤せるか、楽しみにしていよう」

……暇を持て余した魔王の気まぐれ。

これが草薙光一を巻き込む大騒動へと発展するのであった。

* * *

(ゾクツ!!!)

ちよっ!

なんか嫌な悪寒がしたぞ。

魔王になってからやけに直感が鋭くなったからな。
こういう時は絶対なんか面倒事が起こるんだ。

あ、ヤベツ、フラグ立てちまった。

.....

「あ?」

つてオイ、なんか空曇ってね?

っーかあれ完全に雨雲だよ。

地中海は滅多に雨降らないはずじゃ.....

ん?

なんだあの爺さん。

何か・・・何かが他とは違う。

いったい.....

と、考え事をしているとその爺さんが話しかけてきた。

「貴様が草薙光一か、探したぞ」

え？俺？

どこかで会ったか？

・・・どうしたアリシア？

顔が蒼白だぞ。

「そんな、ヴォバン侯爵。何故ここに・・・」

！！！！

サーシャ・デヤンスタール・ヴォバン。

この前からできたあのバ・・・サルバトーレ・ドニと同じくバトルジャ戦闘ンキ狂と聞いていたが・・・。

こんなところでお目にかかるとはね。

「なんか用か爺さん。俺は眠いんだが」

「ずいぶんと若いな。そういえば私が王となったのも君ぐらいの歳頃であった。それと、既に三柱の神々を倒していると聞いたぞ」

「何が言いたい？」

「私は楽しみたいのだよ、戦いを。さて、小僧。このヴォバンの飢えと渴きを多少なりとも満たしてくれることを期待しておるぞ」

そう言い放ち、大量の狼を召喚するヴォバン。

プツン、と俺の中で何かが切れた。

セツカクノナツヤスミ、セツカクノイタリアリヨコウ（注 任務・

・・・というか依頼です。

なぜコンナジジイニジャマサレナケレバナラナイ？

コンナジジイニ！

気づけば、俺は天叢雲剣を振るっていた。

「フハハハハ、魔獣狩りじゃー！」

注 光一はテンションがおかしくなっています

狼を次々と斬り殺していく。

「ほう、なかなかやるではないか」

それをおもしろそうに眺めるヴォバン侯爵。

その余裕、今に無くしてやる。

狼を狩り終えた俺は、標的をジジイに変更した。

「死ねクソジジイ！」

雷を溜めた天叢雲剣を振り下ろし、電荷を帯びた粒子を高速で撃ち出す。

荷電粒子砲

理論上は可能とされながら、加速器の小型化が上手くいかないことと電力の不足により実用化されないでいる兵器。

その威力は想像を絶する。

だが、流石は現存する最古の魔王というべきか、ヴォバンは荷電粒子砲をスレスレで回避した。

どれだけ威力が高くても当たらなければ意味は無い。

「なるほど、自身の権能を良く使いこなしている。やはり狼だけでは不足か。ならば、我が従僕達も加えて第二ラウンドといこうか。せいぜい跳ね回って、私を楽しませろ」

ヴォバンが腕を振り上げた。

周囲に現れる何人もの人々。

だが、彼らの顔には精気も覇気もない。まるで死人のようである。

これが有名な、侯爵^{やっ}の権能である『死せる従僕の檻』なのだろう。

『死せる従僕の檻』・・・自らが屠った者を生ける亡者に化生させ、忠実無比な従僕に変えるという権能。

うん、チートだな。

ここにリアルチートがいますよ。

って、そんなこと考えてる場合じゃないな。

死せる人間たちが殺到してくる。

アリシアも参戦し、従僕たちを斬り裂くが、中にはそうとうな腕の

者もいる。

おそらく、生前は名のある実力者だったのだろう。仕方ない、新しい権能でも試してみるかね。

俺はサカズキさんのようにマグマ玉で従僕を次々と燃やし潰していく。

それを冷笑しながら見ていたヴォバンは光一に告げる。

「・・・では、第三ラウンドだ」

ヴォバンの姿が大巨狼へと変わっていく。

わざわざ大巨狼になるということは、あの姿はそれ相応のパワーを備えているんだろう。だがな、

「これだけの^まとが大きいなら、外さねえよ！」

先程は見事に回避された荷電粒子砲。

普段のヴォバンなら易々と避せただろう。

しかし、今回はその巨体が仇^あとなつた。

荷電粒子砲が直撃する。

直後、見上げんばかりの巨体は消え失せ、痩せた老人に戻っていく。

「やってくれたな、小僧」

すくなからぬダメージは与えたようだが、致命傷ではない。

やはり、あの巨狼の姿は防御力も高いようだ。

風が唸り、烈風が光一を吹き飛ばす。

「まあ、善戦したと誉めてやろう。期待にたがわぬ戦いぶりではあった」

雷鳴が轟くと、天より下ってきた稲妻が打ち据える。

光一も風と雷で対抗するが、攻撃は防がれ、逆に防御は突破される。

暴風と雷を操るのはどちらも同じ。

だが、300年という経験の差が両者の間を大きく隔てていた。

「暇つぶしとしては、なかなか刺激的だったぞ。だが、経験不足だな」

走る雷光。

全身に雷を纏い、どうにか防ぐ。

「ふむ、しぶとい。先刻から気になっていたが、小僧、貴様は昔の私に少し似ておるよ。魔術など何も知らぬ身で王の権能を手に入れ、いかなる魔術師も修得できない力を闘志と智慧で使いこなす。それは私がかつて通った道だ」

今度は突風で体を叩かれ、吹き飛ばされる。

不味いな、技量は侯爵やっの方が圧倒的に上。

炎も風も雷もすべて通用せず、天叢雲剣で斬りつけようにも近づくと

ことさえ出来ない。
どうするか……。

……

はっ、らしくない。

元々技量では圧倒的な差があるんだ。

あれも駄目、これも駄目ってんなら何も考えずに全力でブチかます
だけだ。

出力だけなら劣ってるわけじゃないしな。

俺は全呪力を集中させ、特大の雷撃を解き放つ。

ヴォバンは全力を傾けて、押し寄せる雷を逸らそうとしたが、そこ
へアリシアが魔剣を投擲。

ヴォバンはそれを飛びのいてかわしたものの、集中力を乱し、津波
のように襲い来る雷撃に呑み込まれ、あえなく灼き尽くされた。

勝った！

この時、俺はそう確信した。

しかし……

さきほどまでヴォバンが立っていた場所にいつのまにか積っていた
砂 いや、塵か が巻き上がり、いきなり人の形を作り、知的
な風貌を持つ老侯爵の姿となった。

「なん……だと……!？」

復活した!?

なるほど、これがやつの切り札か。

「これから始まるのは第四・・・いや、第五ラウンドということですよいか?」

「俺としてはそろそろ止めたいんだけどなあ」

この復活劇で大分消耗したとはいえ、ジジイにはまだ余力がある。このままでは俺の負けは確定だが・・・。

「・・・ふん、ここで潰すには惜しいな」

ヴォバンはそう言って、臨戦態勢を崩す。

「次に相まみえるときこそ、貴様を全力で狩り捕ってやろう。そのときに備えて、腕を磨き、修羅場をくぐり抜けておくことだ」

そう言って、最古参の魔王は去っていった。

「まったく、何なんだあのジジイは?嵐と共に来て、嵐と共に去っていくとは・・・べ、別に比喻表現じゃないぞ」

本当にそのまんまの意味だ。

「ですが助かりました、私もこれ以上は戦えそうにありませんでしたし」

アリシアも息を整えながら話しかけてくる。

従僕たちとの戦いはそうとう苦戦したようだ。

ま、あれだけの従僕と戦いながら援護してくれたんだ。
アリシアには感謝してもし尽くせないな。

と、そこで俺はようやく気付いた。

周囲は俺とジジイが暴れまわったせいで悲惨な状態になっている。

・・・

やっちゃまった

反省も後悔もしているけど、たぶん次ぎがあったらまたやるだろう。

青い空っていいな。

第8話 ヴォバン襲来！（後書き）

戦闘の終わらせ方をまったく考えてなかった件について。

ここまで時間がかかった原因はレポートとかテストとか就活とか色々ありますが、最大の原因はこいつです。

原作だと、ヴォバンは祐理の安全を確保する余裕がない。ルールを守れないということですが、この作品では・・・orz
後回しにしていたツケがこれほど大きいとは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3007n/>

ニートになりたい神殺し

2011年1月25日17時57分発行